

申請者	学科名	看護学科	職名	講師	氏名	北村 亜希子 印
調査研究課題	不妊に対する看護学生の知識と意識					
交付決定額	300,000					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	北村亜希子	看護学科・講師	母性看護学 ・助産学	研究計画、調査、分析、 学会発表、ポスター作成	
	分担者	岡崎愉加 原田さゆり	看護学科・准教授 看護学科・助教	助産学・ 母性看護学 助産学・ 母性看護学	調査 調査	
調査研究実績の概要	<p>【目的】 一般高校生・大学生を対象にした意識調査では、高校生への性教育の実施率は高いが、不妊原因などでは今後さらに情報提供が必要であった（小寺他、2010）。また、女子学生も含めた看護学生を対象とした不妊に対する知識意識調査は明らかにされていなかった。そこで、この現状を明らかにするため将来親になる世代の看護学生を対象に、不妊女性に対する理解や不妊治療への関心や受け止め方、不妊治療について知識を明らかにし検討することを本研究の目的とした。</p> <p>【研究方法】 1) 調査方法 平成25年7月～9月研究者が、研究目的を書面で説明し、倫理委員会で承認の得られたアンケート用紙と依頼書を配布した。研究協力に同意が得られた学生のみアンケートに回答してもらい、ボックスに投稿してもらった。</p> <p>2) 調査対象 19～24歳の岡山県内のA大学看護学科学生175名と看護専門学校生223名の計398名</p> <p>3) 分析方法 基本属性の平均値および標準偏差は記述統計を用いた。各質問項目の得点と割合は項目ごとに記述統計を行った。統計処理には統計ソフトSPSS18.0 j for windowsを使用し、推測統計値の有意水準は両側5%未満とした。</p> <p>【結果】 398名中385名（96.7%）から回収したが、欠損値のない有効回答はA大学看護学生161名中</p>					

<p>調査研究実績 の概要</p>	<p>156名、B看護専門学校生191中168名の計324名(81.4%)を分析対象とした。交際経験のある大学生115名(73.7%)、専門学校生は135名(80.4%)であった。性交経験がある大学生66名(42.3%)、専門学校生は90名(53.6%)であった。結婚願望がある大学生142名(91.0%)、専門学校生は140名(83.3%)であった。出産願望がある大学生が144名(92.3%)、専門学校生は143名(85.1%)であった。また、出産願望のある学生には何歳までに出産したいか、出産願望の無い学生には一般的に何歳までに出産できればよいかという問いに対しては、大学生は30歳が1番多く56名(35.9%)、20代前半を希望している者は2名と少なかった。25歳から30歳までに128名(82.1%)の学生が出産したいと答えていた。また、30代以降も18名(11.4%)が答えていた。専門学校生も30歳が最も多く52名(31%)、20代前半での出産を希望する学生は10名(6%)であった。25歳を希望している学生は43名(25.6%)を占め、30代以降はほとんどいなく10名(5.4%)となっていた。</p> <p>不妊症は、子どもを望む夫婦のどのくらいの割合でいるかという質問に対し、大学生の正答は88名(56.4%)であり、専門学校生は88名(52.4%)であった。不妊症と診断された場合、夫婦ともに原因がある確率はどのくらいの割合でいるかという質問に対し、大学生の正答は85名(54.5%)であり、専門学校生は96名(57.1%)であった。</p> <p>女性の生殖機能が低下し始めるのは何歳ごろかという質問に対しては自由回答とし、大学生からは全員回答が得られ、大学生の正答率は11名(7%)と少なく、最多は40歳が53名(34%)であった。30代で低下すると回答した学生は77名(49.4%)でほぼ半数であった。最高齢の回答は60歳であった。専門学校生の正答率は3名(1.8%)と少なく、最多は40歳で51名(30.4%)であった。30代で低下すると回答した学生は68名(40.5%)であった。最高齢の回答は65歳で、60歳と答えた学生も5名(3.0%)いた。</p> <p>また、妊娠した女性が自然流産するのはどのくらいの割合でいるかという質問に対し、大学生の正答は22名(14.1%)であり、専門学校生は29名(17.3%)であった。</p> <p>ピルで子宮内膜症を予防することは不妊症を予防することも期待できるかどうかを正誤で質問すると大学生の正答は62名(39.7%)であり、専門学校生は51名(30.4%)であった。</p> <p>性交時にコンドームを使用することは不妊予防に効果があるかどうかを正誤で質問し、大学生の正答は87名(55.8%)であり、専門学校生は99名(58.9%)であった。</p> <p>【結論】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大学生に比べ、専門学校生は交際経験、性交経験ともに多かった。出産希望年齢は専門学校生の平均は2歳ほど低く、大学生は晩婚傾向にあった。 2. 不妊に関する知識は大学生と専門学校生の間で有意な差は見られなかった。また、両学生群ともに不妊に関する知識の定着には至っておらず、今後は知識の定着のための対策が必要であるといえる。 <p>大学生と専門学校生のどちらも不妊に対する知識の定着が低かった。さらに、学生の結婚出産希望年齢が高いことなどから、今後不妊のリスクは増加することを予測されるため、知識の定着と不妊に対する理解を深めることができ、教育の充実が重要になることが示唆された。</p> <p>今後は記述統計の分析結果を集積した新たな分析を行い、学会と研究論文として公表することを予定している。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>2014年岡山県立大学OPU他で発表する予定。</p>